

市史の広場



氷庫跡（上積翠寺町）



積翠寺の天然氷

飯島忠行

積翠寺には天然氷の池が五ヶ所に在った。

天然氷と言っても底を平にして周囲を一メートルくらいの高さの土手で囲んだ溜池に川の水を入れて自然の寒気で凍らせたものである。どの池もコンクリートは使用せず底には平の石を敷詰め、目地には粘土が使われていた。

池は中川（要害山の西の沢）に二ヶ所、東川（要害山の東の沢）に三ヶ所在った。池のあった場所は日当りが悪くて風通しがよく、針葉樹に囲まれ水の引き入れに都合のよい所であった。

中川の二ヶ所の池は現在、中央一丁目で雑貨荒物店を営むリビングセンターマエダの何代か前の人が明治初期に水問屋を創業し、明治の前半になって自家販売用のために造ったものである。たまたま番小屋に泊っていた当主が強盗におそわれ、非を論したところ持っていたこん棒で撲殺され、金鎖の懷中時計を奪取された。この事件を最後

に製氷を中止した。

私達が子供の頃は池の跡にミヅナラが生えてよい遊び場であったが、何度かの台風豪雨のため土手や池の跡はほとんど流失して当時を偲ぶ面影は全く無い。

東川の三ヶ所の溜池の中で最後に残ったのは私宅のものであった。この池は明治三十一年に祖父樫太郎が同郷の林信夫氏に製氷溜池の用地として貸渡したもので、賃貸料は一カ年二十二円で年々製氷時に支払う等の契約書が残っている。当時農地にも使えない沢地の賃貸料としては高額のようにも考えられるが、道路沿であり、氷庫（氷の貯蔵庫）を建てた東側の斜面が岩盤で松が密生し良質の水源（「水の手の水」の伝説がある）となっているなど、他の場所より立地条件が優れていたためと考えられる。賃貸期限が切れた後は私宅で製氷をつづけた。朝早く氷の上の落葉を拾い集めたり細かいゴミを丁寧に掃き出し、夜から朝

にかけての寒さを予測して水の張り込みを加減したようである。普通は三センチくらい、特に厳寒が予想された時は五センチくらいの水の張り込みをしたようである。だいたいこの仕事が朝飯前の仕事であった。

日中は小鳥を追い払うことも糞を氷に落させないための大切な仕事だったと思う。

翌朝になると前に凍った氷の上にきれいに凍結している。こんな作業を何回か繰り返して四〇センチ程度の厚さになると、氷の上に尺縄を使って五〇センチ四方くらいの筋をつけ、巾広で丈のつまった水切のノコギリで切割り、池から三メートルくらい低い所にある氷庫の中までスベリ板にのせて落した。中にいる人夫がそれを手際よく並べ、氷と氷の透き間に挽糠を詰めた。最上部は特にたくさん挽糠で覆い、次の切出しを持つ。沢に風が吹いて寒い朝、父に手伝う時「寒いな」と言ったら「寒くなきやこまら」と叱られた記憶もある。

土用になると氷の出荷が始まる。四角に切った氷をむしろに包み馬の鞍の両側に一ヶつつけて運搬した。通常は五頭、時によっては十頭くらいの時もあった。氷が溶けていたら落ちた水が、跡を残して長く

続いたこともおぼえている。暑い夏は氷の値段も上がるが、下町まで運ぶのに時間がかるので、間屋へ着く頃には半分くらい溶けたこともあったようである。

冬から土用までの長い間苦勞を続け大勢の人手によって造られた氷が、一貫目いくらになったのか何の記録も残っていないのは残念である。

あのころ・このころ

小沢綱雄

青沼に製氷会社が出来てから積翠寺の天然氷の歴史も終末を遂げた。現在は池の跡に松が繁り往時を偲ぶよすがもないが、氷庫の跡は昔のままはつきり残っている。甲府近郷では珍しいものと思われ、いずれ標識でも建て後世に伝えたいと思う。

(||投稿||)

本市は来年で、いよいよ一世紀という年輪を刻むことになります。私事で恐縮ですが、私が市議会議員として市政に関わるようになったのが昭和三十四年のことです。で、来年は丁度三十年となり感慨も一人のものがあります。当時の有権者は九万八千人余で立候補者は六三名、この年の当選者が現在八期になる現職は、早川武男・三井

五郎・内藤秀治の各議員と私の四人です。

昭和三十四年といえますと、四月十日に皇太子殿下の御結婚があり、パレードのテ

レビ中継には人びとが群れ、全国民挙げての奉祝ムードに溢れておりました。テレビといえばこの年九月にNHK甲府テレビが放送開始、十二月にはラジオ山梨テレビが開局するなど、折からの神武景気を上回る岩戸景気といわれた、経済的にも好況の時代で、国民生活にもようやくとりが見えはじめていたころです。

一方、八月十三日夜から十四日にかけての台風七号は、激しい風雨により市内に空前の大被害を及ぼし、さらに九月二十六日